

平成艸紙



おりおりの記

平成の終焉に思うこと

日本学士院会員
東京大学名誉教授

三谷太一郎

敗戦の年の昭和20年8月、私は今の小学校に相当する国民学校の3年生でした。この年の6月29日未明に私が住んでいた岡山市は米軍機による激しい爆撃に曝され、全市は焼き払われました。昭和19年8月以降、日本本土爆撃のための態勢を整えた米国の重爆撃機部隊は、西太平洋上のマリアナ群島を基地として、東京をはじめ、日本の諸都市を攻撃の対象としていたのです。当時指揮官で米国空軍の象徴的リーダーであったカーティス・ルメイの部下として、対日空爆作戦計画を立案していたのが、後年ケネディおよびジョンソン政権の国防長官となり、ベトナム戦争を主導したロバート・マクナマラでした。太平洋戦争当時、20代であったマクナマラは、マサチューセッツ工科大学の統計学の助教授から軍務に服し、空爆の破壊効果を高めるために、超低空爆撃を立案しました。それが最初に適用されたのが昭和20年3月10日の東京大空襲であり、私自身が体験した岡山への空襲にも、その方式が踏襲されました。

家を失った私たち一家は、父の出生地の農村に移り、そこで敗戦を迎えました。ラジオ受信機を持っていた数少ない農家の一軒に、近所の住民が8月15日の正午に集まりました。そこでポツダム宣言の受諾を告げる昭和天皇の「玉音放送」を聴いたのです。

当時学習院初等科6年に在校中の平成天皇は、御用邸のあった日光の疎開先のホテルで、私どもと同じように「玉音放送」をお聴きになり



ました。ポツダム宣言の正式受諾に先立って、8月10日には敗戦にそなえて、昭和天皇の下では廃止されていた東宮職が復活し、かつて東大の民法の教授であった穂積重遠が東宮大夫に任じられました。平成天皇は、急遽日光に赴いた穂積大夫とともに、「玉音放送」を聴かれたわけです。当時の穂積の日記（穂積重遠著、大村敦志校訂『終戦戦後日記』有斐閣、平成24年）には、その模様が描かれています。

平成天皇は私どもと同じ学童としての戦争体験を共有する天皇でした。夏目漱石は、小説『こころ』の登場人物で、自死する「先生」の遺書の中で、「私は明治の精神が天皇に始まって天皇に終わったやうな気がしました」と書いています。「明治の精神」を「戦後の精神」といいかえれば、私の気持ちに近いものがあります。